

## 中世ヴァルド派詩編『舟』

有田 豊（訳・注）

### Abstract

This paper is the Japanese translation of *La Barca* (the boat), one of the works included in the collection of poems composed by the medieval Waldenses in the early 15th century. This poem comprises two parts, the first dealing with original sin and the salvation of human beings in this world and the second describing human life in this world and our destination after death. Human beings are compared to “the boat,” and this world to “the sea.” In other words, when a boat sails on the sea, it means that people live in this world. In this process, various “merchandise” is loaded onto the boat. The merchandise is a metaphor for the deeds of man, such as virtues and sins, and at the port of divine judgment where the boat arrives at the time of death, the value of each merchandise is evaluated, and the destination after death is determined.

キーワード：ヴァルド派，キリスト教，現世蔑視，中世写本，ロマンス語文献学

**Keywords :** Waldenses, Christianity, contempt for the world, medieval manuscripts, Romance philology

### I 中世ヴァルド派詩編とは

中世ヴァルド派詩編は、中世末期のヴァルド派が生み出した8本の詩（韻文作品）の総称である。ヴァルド派（仏: Les Vaudois, 伊: I Valdesi, 独: Die Waldenser, 英: The Waldenses, 羅: Valdenses, Waldenses）とは、1173年頃にリヨンの裕福な市民ヴァルド Valdo によって創設された説教集団「リヨンの貧者たち」に端を発する、キリスト教の一宗派を指す。創設時は、聖書に忠実であることを第一とした清貧に基づく使徒的生活を勧める集団だったが、1184年に「異端者」として断罪され、1215年にはカトリック教会から破門されてしまう。以後、約350年間にわたって地下活動を展開、1532年には宗教改革運動に参加して、「ヴァルド派教会」を設立した。現在では、イタリアを中心としてスイスや南北アメリカにもコミュニティがあり、約45,000人の信者を擁する改革派系プロテスタントの一派となっている。本稿で扱う中世ヴァルド派は、教会からの破門後、13世紀から14世紀にかけて少しずつ組織を構築し、内部に説教師と一般信者という2つの立場を設けるようになった<sup>1)</sup>。説教者たちは「バルバ」Barba と呼ばれ<sup>2)</sup>、2人1組になってヨーロッパ各地を遍歴しながら説教を行い、組織の拡大を図った。しかし、それを取り締まる異端審問官の眼が厳しくなると、公の場での説教が困難となり、彼らは一般信

者たちと共にアルプスの山中への隠遁を余儀なくされる。同時に、彼らの説教の用途も、「他者をヴァルド派に改宗させる」という外向きのものから、「自分たちの信仰を保持し続ける」という内向きのものへと変化していった。そして、15世紀から16世紀にかけて、説教師たちは一般信者に向けて説教を行いつつ、自分たちの信仰に関する様々な文書を作成するようになった<sup>3)</sup>。本稿で取り上げる詩編は、このような背景の中で生み出されたものである。

中世ヴァルド派詩編は、全部で8本の詩で構成されており、その写本は14世紀から16世紀の間に少しずつ作成された<sup>4)</sup>。執筆に用いられた言語は、イタリアとフランスの国境にまたがるコツィエ・アルプス地域で当時使用されていた古オック語である<sup>5)</sup>。とりわけ注目されてきた作品は『崇高なる読誦』*La Nobla Leyçon*であるが<sup>6)</sup>、それぞれの作品に同派の教理や精神世界が描かれていることから、当時のヴァルド派が有していた思想を知るのに有効な史料群と位置づけられよう。Gonnet & Molnár (1974)によれば、この詩編は、カトリック教会が信者に使徒信条や主の祈りを覚えさせるのと同じように、説教師が一般信者に自分たちの信仰を教え込むことを目的として用いられたようである<sup>7)</sup>。つまり、説教師がテキストに基づいて詩編を唱え、文字の読めない一般信者はそれを聴き、詩のリズムに合わせて何度も復唱しながら、徐々に内容を暗記していくのである。ヴァルド派の創設者であるリヨン市民ヴァルドはラテン語が読めなかったため、私財を投げうって聖職者を雇い、聖書の俗語翻訳を作成させた。そして彼は、俗語翻訳を熱心に読み込んで内容を暗記し、路上で説教を行ったとされる。彼のように、聖書の内容理解に際して「俗語を用いて暗記する」という方法は、ヴァルド派内部では一般的だったようである。それを裏付けるものとして、1260-1266年頃にパッサウ司教区の名もなき修道士によって記された異端論駁書『反異端ヴァルド派の書』*Liber contra Waldenses haereticos*には、「無学な農民がヨブ記を暗記していたり、他にも新約聖書の内容を完璧に知っていたりする人々を何人も見た」<sup>8)</sup>、「男女を問わず、(新約聖書の内容を)俗語で暗唱できないものは稀である」<sup>9)</sup>という記述がある。通常、カトリック教会の信者は教会に行ってミサに参加し、ラテン語という難解な言語を通して聖書の内容を理解しなければならない。その点、ヴァルド派においては、自分たちが理解しやすい俗語というツールを使って、聖書の内容に耳を傾けることができたのである(中世ヴァルド派文書の多くが、ラテン語ではなく古オック語で記されているのは、こうした内部状況を示唆するものと考えられる)。中世ヴァルド派詩編は、言うまでもなく、8本全てにおいて聖書の内容が前提となっている。また、各作品には共通のテーマがみられ、人間の一生に関する悲観的な観念、現世の快樂を忌避することの重要性、現世で犯した悪行に対する悔悛の必要性などについての記述が、どの作品にも含まれている<sup>10)</sup>。また、こうしたヴァルド派の持つ精神世界の描写に加え、各作品には聖書に照らし合わせた否定／禁止事項(婚外の肉体関係、不純な金銭取引、他者への憎悪、偶像崇拜、煉獄、虚言、背任、殺人、吝嗇、離婚、宣誓、復讐、蓄財など)や奨励事項(罪の告白と改悛、悪人への施しと祈り、悪人への赦し、断食、貞操の保持など)が散見され、ヴァルド派の持つ教理が見て取れるようになっている。

表 1 中世ヴァルド派詩編作品一覧<sup>11)</sup>

作品名	行数	概要
『崇高なる読誦』 <i>La Nobla Leyczon</i>	485 行 (G, D) 492 行 (C)	教理書的作品。終末の接近、聖書の歴史書部概観（旧約・新約）、イエスの教え、イエスの生涯と活動、墮落したキリスト者たち、神が与えた掟などについて記されている。
『舟』 <i>La Barca</i>	331 行 (D) 333 行 (C) 337 行 (G)	教理書的作品。2 部構成で、第 1 部にはロタリオ・ディ・セニ著『現世の蔑視』の部分翻訳が記され、第 2 部には人間を「舟」に、現世を「海」にたとえて、現世における人間の行いとそれに付随する死後の行き先が記されている。
『4 つの種の福音』 <i>L'Avangeli de li quatre semencz</i>	300 行 (G, D)	説教書的作品。『マタイによる福音書』第 13 章 1-23 節に含まれる「種を蒔く人」（4 つの種が出てくる）のたとえ話が、詩の形式で言い換えられている。
『祈祷』 <i>Oraczon</i>	94 行 (D)	祈祷書的作品。神に直接向けた罪の告白であり、悔悛者は神の掟に背いたことや、隣人に対して罪を犯したことについて赦しを乞うている。
『現世の蔑視』 <i>Lo Desprezzi del Mont</i>	115 行 (G, D)	教理書的作品。永遠の罰に対する不安から、人生の儚さや財産の無価値について述べ、現世における善行と悔悛の必要性を説いている。なお、『舟』に含まれる『現世の蔑視』と同じ書名だが、内容は異なっている。
『永遠なる父』 <i>Lo Payre Eternal</i>	156 行 (G, C) 158 行 (D)	祈祷書的作品。三位一体をモチーフとした 3 行×3 連の繰り返しによって構成される連祷で、自身の魂が浄化され、父なる神と自身とが完全に 1 なる存在になれるよう願っている。
『新たな救慰』 <i>Lo Novel Confort</i>	299 行 (G, D) 300 行 (C)	教理書的作品。俗世を離れ、艱難辛苦を耐え忍びながら神に仕えることへの奨励が説かれており、良き羊飼（キリスト）が与えてくれる「命の泉」の水を通して、人は大いなる救慰が得られるという。
『新たな説教』 <i>Lo Novel Sermon</i>	408 行 (G) 437 行 (C) 444 行 (D)	教理書的作品。財産や快楽への愛は死後の苦難をもたらす原因となるため、現世とそこにある悦びから離れることへの奨励と、どのような者が地獄に墮ちるのかを説いている。

詩編を含む写本は、3 本現存している。保管されている場所の地名から Cambridge 写本、Genève 写本、Dublin 写本と表記され、それぞれ羊皮紙、犢皮紙、紙が使用されている。3 本の写本のうち、最も古い版は Cambridge 写本<sup>12)</sup>と言われている。15 世紀前半に成立したとされるこの写本は、Cambridge University Library に所蔵されており、羊皮紙に書かれている。この写本は、ヴァルド派への迫害が激化していた 17 世紀半ばに、コツィエ・アルプスに位置するヴァルド派の谷を訪れた外交官サミュエル・モーランド Samuel Morland によって 1658 年にケンブリッジにもたらされた。長らくスペイン語の信心書として扱われてきたが、1862 年に司書ヘンリー・ブラッドショー Henry Bradshaw によってヴァルド派文書であることが確認され<sup>13)</sup>、19 世紀における成立年代論争に大きな影響を与えた。続く古い版は Genève 写本で<sup>14)</sup>、15 世紀末ごろに成立したとされる。Bibliothèque Publique et Universitaire de Genève に所蔵されており、犢皮紙に書かれている。Cambridge 写本と同じく、迫害が激化していた 17 世紀半ばに、戦火で写本が焼失することを危惧した当時のヴァルド派教会議長ジャン・レジェ Jean Léger が、ヴァルド派の谷からジュネーヴの図書館へと持ち込んだことで同地にもたらされた。3 つの写本の中で最も新しい版が Dublin 写本で<sup>15)</sup>、16 世紀前半に成立したとされる。Trinity College Library of Dublin に所蔵されており、紙に書かれている。17 世紀前半にアイルランド教会の聖職者ジェームズ・アッシャー James Uscher によって聖書研究用の史料として購入され、同地にもたらされた。先に言及した『崇高なる読誦』は 17 世紀に初めて校訂がなされ、19 世紀になると新たな校訂版が相次いで世に出されていくが、詩編に含まれる他の作品に関しては、19 世紀末以降に数本の校訂が出ている程度である。本稿で扱う『舟』の校訂は、これまでに Apfelstedt (1880) による

Genève 写本版<sup>16)</sup>, Balma (1906) による Dublin 写本版<sup>17)</sup>, Chaytor (1930) による3写本合同版の計3本が世に出されているものの, Chaytor 以降は全く校訂が出ていない状態である<sup>18)</sup>。

## Ⅱ 『舟』について

『舟』 *La Barca* は、中世ヴァルド派詩編に含まれる作品の1つである。成立年代、作者、ともに明確な情報はないが、「15世紀初頭」に成立したとされている<sup>19)</sup>。『舟』は6行で1連を構成する韻文で書かれており<sup>20)</sup>、総行数は写本によって異なるが全部で331行から337行ほどで、本稿は Chaytor による校訂版<sup>21)</sup>を底本とした邦訳である。

『舟』は、大きく2つのパートに分けることができる。最も長い行数を含む Genève 写本を例にすると、第1部は1-162行、第2部は163-337行が該当する。第1部では、現世に生まれ落ちた人間が抱える原罪と、その救いについて記されている。第1部の内容は、後に教皇インノケンティウス3世（在位1198-1216年）となる枢機卿ロタリオ・ディ・セニ Lotario di Segni（1160頃-1216年）が1194-1195年頃に著した『現世の蔑視、あるいは人間の悲惨な境遇について』*De Contemptu mundi, sive de miseria humanae conditionis libri tres*（以下、本稿では『現世の蔑視』および *De Contemptu mundi* と略記）の内容と酷似しており、実質的に同作品の翻訳に近いものといえる。これについては、次章にて詳述する。

第2部では、①死の接近（175-210行）、②死後の行き先（211-276行）、③悔悛の奨励（277-337行）について記されている。①では、死というものが自分の身に突然ふりかかることへの恐怖と、死の訪れに対して平素より十全に備えておくことの重要性が説かれている。中世末期には、死後の救済に与るべく、可能な限り事前に死期を知り、罪を残らず告白し、終油の秘蹟を授かり、全てを神に委ねて、穏やかに死を迎えることが「善き死」とされていた<sup>22)</sup>。そのため、こうした準備なしに死んでしまう「突然死」は、当時の人々にとって最大の恐怖であり、なんとしても避ける必要があった。人生の中で死が訪れる時期は誰にもわからないが、万人に、平等に、必ず訪れるものであることから、いつ自分が死の瞬間に置かれてもいように普段から万全を期しておくべき、と述べられている。続く②では、死後の行き先がどのようにして決まるのかが説かれている。著者は、人間を「舟」に、現世を「海」にたとえており、地上世界という海を航海していく（＝人が生きていく）中で舟に載せた「積み荷」によって、死後の行き先が決まるという。この「積み荷」とは、善行や徳、悪行や罪といった生前に人間が為してきた所業の比喩であり、死の際に舟が到着する神の裁きの港において各々の積み荷の価値が評価され、死後の行き先が決まるという仕組みである<sup>23)</sup>。よって、金、銀、宝石といった品々を舟に積んでいる「賢明な商人」は、天国へと導かれ、悠久の安息が得られる。一方で、薪、干し草、藁といった品々を舟に積んでいる「哀れな罪人」は、地獄へと導かれ、永遠の苦痛にさらされるのである。③では、死後の行き先が決まる時に人間が感じる恐怖への救済策として、良き助言と真の懺悔を与えることができる聴罪司祭の姿が導入されている。①と②の内容を踏まえて、人が死後の救済に与るためには、自分の悪行に目を向け、神の前にへりくだり、慈悲を求め、告解者の元で罪を告白し、真の懺悔をすることが肝要だという。告白の際には、自身が為した虚言、宣誓、他者への憎悪や怨恨などについて述べるよう指示されているため、③の部分から

は当時のヴァルド派が罪とみなし、禁止していた行為が読み取れるだろう。なお、『舟』を通して具体的にどのような行為が教理として読み取れるかの分析は本稿の目的から外れるため、別の機会に譲ることとして、本稿では『舟』の概要を解説するに留めておく。

### Ⅲ 『現世の蔑視』との関係

前章で述べたように、『舟』の第1部は『現世の蔑視』の翻訳に近いものである。『舟』と『現世の蔑視』との間に類似性があることを初めて指摘したのは、Chaytorである<sup>24)</sup>。Chaytorは『現世の蔑視』を字義どおりに翻訳したものが『舟』の冒頭部分であるとし、両作品の対応箇所を挙示している。また、後にDal Corso (1979)が両作品の対応箇所を慎重に比較した上で、『舟』が『現世の蔑視』を翻訳したものか、部分的に翻案したものかどうかを検証している。比較の結果、Dal Corsoは、本文の1-120行を第1部、121-337行を第2部と区分した。そして、第1部は『現世の蔑視』とのつながりが明確であるが、第2部は同作品とのつながりが希薄であり、第2部の冒頭121-160行の間に多少の痕跡が見られるのみで、161行目以降は完全に消えてしまうと結論づけている<sup>25)</sup>。ChaytorやDal Corsoが述べるように、確かに『舟』の前半部分は『現世の蔑視』の内容に由来する可能性が高い。『現世の蔑視』は3巻本であり、『舟』との関係が見られるのは、そのうちの第1巻（全31章）である。論の展開について『舟』の著者は、第8章を除き、基本的に『現世の蔑視』の論の順序を守っている。ただし、一部が省略されていたり、直訳の部分もあれば翻案が含まれる部分もあるため、第1巻を全て字義どおりに翻訳したとは言い難いものとなっている点には注意が必要である。

表2 『舟』と『現世の蔑視』対応箇所一覧<sup>26)</sup>

<i>La Barca</i>	<i>De Contemptu mundi</i>
II. (vv.7-12)	Prologus (序章)
III. (vv.13-18)	I. De miserabili humanae conditionis ingressu (人間の悲惨さについて)
IV-V. (vv.19-30)	II. De vilitate materiae ipsius hominis (物質の下劣さについて)
VI-VII. (vv.31-42)	III. De vicio conceptionis (懐妊の罪悪について)
VIII-IX. (vv.43-54)	IV. De conceptione infantis (懐妊について)
X. (vv.55-60)	V. Quali cibo conceptus nutriatur in utero (胎児はどんな食物で体内で養われるのか)
XI. (vv.61-66)	VIII. De nuditate hominis (裸身について)
XII. (vv.67-72)	VI. De inbecillitate infantis (幼児の虚弱さについて)
XIV. (vv.79-84)	VII. De dolore partus et eiulatu infantis (出産の苦痛と子供の泣き声について)
XVII. (vv.97-102)	IX. Quem fructum homo producit (人間はいかなる果実を生み出すのか)
XVIII. (vv.103-108)	X. De incommodis senectutis et brevitate vitae hominis (老齢の不安と人間の短い生涯について)
XIX. (vv.109-114)	XI. De incommodis senectutis (老齢の不安について)
XXI. (vv.121-126)	XIII. De studio sapientum (賢者の努力について)
XXIV. (vv.139-144)	XIV. De variis studiis hominum (人間の様々な営為について)
XXV. (vv.145-150)	XV. De diversis anxietatibus (様々な不安について)
	XVI. De miseria divitis et pauperis (富者と貧者の悲惨さについて)
XXVI. (vv.151-156)	XXII. De brevi laetitia hominis (人間の束の間の喜びについて)
XXIX. (vv.169-174)	XXIV. De vicinitate mortis (死の接近について)



Dal Corso は、『舟』の第1部(1-120行)と第2部(121-337行)はそれぞれ別の人物によって書かれたか、あるいは1名の人物によって2つの異なる時期に書かれたものと説明している<sup>27)</sup>。その根拠は3つあり、第2部における『舟』と『現世の蔑視』との対応箇所が限定的であること、本作のタイトルにもなっている「舟」la barca というタームが第2部にしか登場しないこと(「舟」のモチーフは、第1部の内容とは何の関係性もない)、第1部のアレクサンドランが第2部のそれよりも不規則であること、が挙げられている。1つの作品とはいえ、『舟』の前半と後半は全く異質な内容となっているため、異なる2つの断片が後に組み合わせられたものだという Dal Corso の説明には首肯できるところがある。その場合、ヴァルド派文書としてオリジナルな内容をより多く含んでいるのは、第2部の方だといえよう。もし2名の人物によって書かれたとするなら、その人物が両方ともヴァルド派説教師なのか、1人はヴァルド派説教師で、もう1人はヴァルド派とは別の有識者なのかという新たな疑問が生まれるが、それについては本稿とは別の機会に考察することとしたい。

中世ヴァルド派詩編の中で、『舟』はカトリック教会の著作の内容が含まれている唯一の作品である。しかし、なぜヴァルド派説教師が著した詩の中にカトリック教会の著作の一部が含まれているのか、先行研究では何も言及されていない。推測の域を出ないが、これについては舟に載せる「積み荷」が関係している可能性がある。『舟』では、自身の舟の積み荷によって死後の行き先が決まるとされている。地獄行きを避けるためには、地獄へと至る積み荷(=悪行や罪とされる行為)がどのようなものなのか、あらかじめ理解しておくことが重要となる。そこで『舟』の作者は、『現世の蔑視』に描かれる現世の人間が犯す悪行や罪の数々を、地獄へと至る積み荷の具体的な例として、作品内に取り込んだのではないだろうか。実際、『舟』の第1部における11-12行目には「この境遇を知ることこそが、人間が高慢にならずに、謙虚さを保ち、天界へ行くための確かな方法だからだ」と記されている。よって、第1部に描かれる悪行や罪を理解しておくことで、人は地獄行きを避け、天国へと至る道を歩むことができるのである。カトリック教会から「異端」とされたヴァルド派であるが、教理の基礎は教会のそれに倣っており、組織として教会自体を強く敵視するような急進的な思想を持っていたわけではない。また、『現世の蔑視』は、中世末期に流行した「現世蔑視文学」(現世を忌避し、来世での救慰に目を向けることを奨励する文学作品ジャンル)の中でも特に数多くの写本が残されており、様々な言語に訳されて広く流通していた、著名な作品である<sup>28)</sup>。そのため、当時のヴァルド派説教師の目にも比較的留まりやすく、現世蔑視文学のコンセプトと『舟』という作品のコンセプトが一致した結果、このような「合作」ともいえる作品が生み出されることに繋がったのではないだろうか。

#### IV 凡例

1. 底本は、Chaytor, H. J. (1930). *Six Vaudois poems from the Waldensian Mss in the University libraries of Cambridge, Dublin and Geneva*. Cambridge University Press. に収められた3つの写本の校訂版とした。
2. Chaytor の校訂版を翻訳するにあたり、Apfelstedt (1880) による Genève 写本の校訂版や、

Balma (1906) による Dublin 写本の校訂版も適宜参照した。

3. 韻文の行数は、訳者が便宜的に付したものであり、写本や校訂版で付されているものではない。
4. 対応する行は、訳文を「『舟』○行目」、原文を「*La Barca*, v. ○ .」と表記した。
5. 対応する節／章は「*La Barca*, ○／*De Contemptu mundi*, ○」と表記し、○の部分にはそれぞれの節と章の番号を記入した。
6. 聖書の引照箇所については、注に章節を記した。書名や章節番号、一部の表現等は、日本聖書協会発行の『新共同訳聖書』に基づく。
7. 『現世の蔑視』との対比に際しては、Innocentii III, (ed.) Achterfeldt, J. H. (1855). *De Contemptu mundi, sive de miseria humanae conditionis*. Apud Eduardum Weber. を参照した。
8. 訳文は、飾り文字がある行を境として、便宜的に2部構成とした（Dal Corso による区分は、本稿に適用しない）。本稿では、第1部を1-162行、第2部を163-337行とする。

## V 『舟』 翻訳

### 【第1部】(1-162行)

#### I

- 1 聖なる三位一体は、我々に与えて下さる
- 2 名誉と栄光に関すること、
- 3 そして、万人の利となりうることについて話す機会を。
- 4 また、聴衆たちにも与えて下さる。
- 5 我々の言葉をよく聞くための
- 6 意思と、心と、理解を示そうとする姿勢を。

#### II <sup>29)</sup>

- 7 人間が置かれた悲惨な境遇について、
- 8 聞きたいと望む者には、私が語ることにしたい、
- 9 なぜなら、人間はそれからすぐに目を逸らし <sup>30)</sup>、
- 10 第1の天使もそれを気に留めてはいないのだが <sup>31)</sup>、
- 11 この境遇を知ることこそが、人間が高慢にならずに
- 12 謙虚さを保ち、天界へ行くための確かな方法だからだ。

#### III <sup>32)</sup>

- 13 ああ、親愛なる兄弟たち、善良なる人々よ、
- 14 ここにある自身の生と死について、
- 15 また、自身に死が訪れるときまでに
- 16 自身が為した善行や悪行について、
- 17 涙と、啼泣と、悲歎をもって、
- 18 各々が考えることとしよう。

#### IV <sup>33)</sup>

- 19 神は、4つの要素で、世界を形成されたのであり、

20 それらは、火、空気、水、土、と名付けられている。

21 神は、火から星と惑星を作り出し、

22 微風や風は、空気の中に含まれ、

23 水は、鳥や魚を生み出し、

24 土は、野獣と不忠な人間どもを生み出している。

V

25 全人類の父であるアダムを生成した土は、

26 4つの要素の中で最も下劣なものである。

27 ああ、泥よ。ああ、塵よ。今の汝は傲慢になりつつあるのか。

28 ああ、不幸の器よ。今の汝は高慢になり、

29 自身を誇って、空虚な美を追い求めているのではないか。

30 汝が成さんとしていることは、死の際に示されるであろう。

VI<sup>34)</sup>

31 ただ、汝は言っておきたいのではないか。

32 自身は土から生成されてはいないということを。

33 なぜなら、土から創られたのは最初の人間だけであり、

34 我々、他の人間は全て、精子から創られているからである。

35 事実、アダムは大地の泥から創られたが、

36 我々は、罪と下劣な行為の渦中において創られているのである。

VII

37 アダムの原料は、土や泥だったが、

38 我々の原料は、危険をはらんだ下劣な精子であり、

39 その受胎は、淫蕩の悪臭の中で行われ、

40 我々の誕生は罪の汚れにおいてなされるのであるが、

41 それは、我々の魂が、罪の不浄さや

42 肉体の汚れ、不義による逸脱を引き寄せるためである。

VIII<sup>35)</sup>

43 不幸にも我々は、辛苦なる状態に陥ってしまった。

44 なぜなら我々は、生前から罪に囚われているからである。

45 神が魂にお与えになった3つの自然的徳は<sup>36)</sup>、

46 魂が肉体との交接を初めて為した時に、

47 肉体を通して得られた快樂が原因で、

48 生まれた時には、ほとんど放棄されてしまっている。

IX

49 このように、無知が原因で理性が曇っているため、

50 理性は、悪も、善も、明白に示すことがない。

51 我々は情欲に束縛されていて、

52 善には目もくれずに、罪を生み出すのである。



53 怒りの感情が支配的になるあまり、  
54 悪を避けるのではなく、避けてはいけないものを避けるようになっている。

X<sup>37)</sup>

55 さらに、被造物である母親の胎内には、  
56 いかなる栄養素があるのか、よく観察してみることだ。  
57 その栄養素とは、触れるだけで果実が芽を出さなくなるという  
58 とても忌々しい、極めて不浄な経血のことである。  
59 そして、月経の期間に懐妊された人というのは、  
60 癲病患者か、もしくは墮落した精神の持ち主となるのである。

XI<sup>38)</sup>

61 我々が纏う衣服の価値とは、どれほどのものなのか、  
62 自身の生後について考えてみてほしい。  
63 我々は裸で現世にやってきて、裸でここから戻っていく<sup>39)</sup>。  
64 貧しい身で現世に入ってきて、貧しさと共に出ていく。  
65 富者と貧者は同じような入口を持っており、  
66 領主と下僕は同じような出口を持っているのだ。

XII<sup>40)</sup>

67 ああ、それはもはや語ることができないほどに劣悪であり、  
68 生まれ落ちてくる人間の多くは、  
69 自分たちが理性的な被造物かどうか、  
70 非常に歪んだ状態にあるかどうかを、判別するのが困難である。  
71 ある者は盲目になり、ある者は聾になり、ある者は啞になり、  
72 ある者は手足が不自由になり、ある者は発狂し、ある者は残忍になる。

XIII

73 各々の状況について、語る必要があるだろうか。  
74 というのも、全人類について一概に言えることだが、  
75 我々は、言葉も、知識も、美德もなく、  
76 脆弱かつ無力な状態で生まれてくる。  
77 我々は、生後すぐに動ける他の動物たちよりも力がなく、  
78 自分1人ではどうすることもできないのである。

XIV<sup>41)</sup>

79 ゆえに、我々は不浄や悪臭の渦中で宿り、  
80 苦痛における悲歎をもって生まれてくるのであり、  
81 以後は、苦労と苦役を伴って成長していくのである。  
82 それから、野獣のように生きていくので、  
83 懺悔をして自身の行いを悔い改めない限りは、  
84 最終的に地獄へと堕ちていくだろう。

XV

- 85 労苦と、恐怖と、苦痛を伴って、  
86 罪人は、この世に生を受ける。  
87 不義は、彼が幾度となく為す業であるがゆえに、  
88 彼は神に背き、隣人とその家族を怒らせる。  
89 最後には、死が彼を迎え入れることとなり、  
90 それは彼の労苦が評価される機会となるだろう。

XVI

- 91 しばしば、罪惡、不浄、不義は、  
92 我々が狡猾に考え、話し、行うものであり、  
93 それは自身にとって正しいことでも、適切なことでも、都合が良いことでもない。  
94 ただ、自らの大いなる邪惡さでもって、それを行うのである。  
95 そして我々は、蛆虫たちの餌食となり、腐敗の塊となって、  
96 多大なる痛みを感じる火の燃料となるのである。

XVII <sup>42)</sup>

- 97 樹木は、自ら美味な果実を結び、  
98 青葉は、自ら芳しい花を咲かせる。  
99 一方で人間は、ミミズや、忌まわしい虱や、虱の卵など  
100 胸の悪くなるような果実を結ぶだけである。  
101 葡萄酒や油、香膏は、樹木から出てくる美酒であるが、  
102 糞や尿は、人間から出てくる悪臭なのである。

XVIII <sup>43)</sup>

- 103 人間が、800 年、900 年にわたって生きたということを、  
104 聖書において頻繁に目にしたものと私は記憶している <sup>44)</sup>。  
105 ソロモンが言うように、今の時代において  
106 100 年生きるということは、世紀を超えて生きるということである <sup>45)</sup>。  
107 これほどまでに生き続ける人は極めて稀であり、  
108 いま 80 歳まで生きる人の生涯は、十分に長いのだ。

XIX <sup>46)</sup>

- 109 もし誰かその年齢に達する人がいるとすれば、  
110 あらゆる感覚が、当人から欠落し始める。  
111 また、理性と理解力も欠如して <sup>47)</sup>、  
112 多くの人々から嫌われるようになっていく。  
113 そして、眼がかすみ、耳が遠くなり、  
114 鼻水をたらし、呼気が汚くなるのである。

XX

- 115 老人の性質といえは、よりけちになることであり、  
116 生きるための糧が少ない時は、失うことをさらに恐れる。  
117 このような老人たちを、ないがしろにすべきではない、

- 118 彼らが老いていくことで、若い世代が生まれてくるからである。  
119 おお、人間よ、汝自身を知れ。そして、宝物や果実が  
120 汝にもたらされることについて、慢心しないように。

XXI <sup>48)</sup>

- 121 どのように良き終末を迎える準備をしているのか、  
122 卑小な者たちの、生後の所業を考えてみるがよい。  
123 ある者たちは、現世で為したことを説明するために、  
124 その行為の理由を把握することに時間を費やしている。  
125 世俗の知恵と人々の賛美において、  
126 彼らは自身の財を使い、時間を浪費するのである。

XXII

- 127 またある者たちは、自身の肉体を満たすことに時間を費やしており、  
128 飲んで、食べては、快楽に身を委ねている。  
129 昼夜を問わず、自身の強い情欲の赴くままに  
130 宴に興じるときの彼らは、多少の配慮をしている。  
131 その配慮というのは、自身の肉体を十分大切に扱い、  
132 際限なく眠って、休息を取ることである。

XXIII

- 133 その他大勢の者たちは、自らの意志に従い、自由にふるまうことで、  
134 罪の報いを受けることへの釈明を探している。  
135 彼らは不和の種を蒔き、人々の間に軋轢を生じさせ、  
136 それに伴って争いや大規模な破壊、  
137 強盗、殺人、その他の悲惨な罪が発生する。  
138 それは到底1年で語れるようなものではないだろう。

XXIV <sup>49)</sup>

- 139 大勢の者たちとは、どうすれば多くの財を得ることができるのかと  
140 自身の心を碎いて思慮する者たちのことである。  
141 ある者は、しばしば海へと出航して、  
142 雨や嵐に耐えなければならない。  
143 またある者は、しばしば大きな危険を冒しては世界を巡り、  
144 平地を闊歩し、山脈を踏破していくのである。

XXV <sup>50)</sup>

- 145 貧困を避けるために大勢の者たちが行っている  
146 他の所業に関しては、全てを話すと長くなる。  
147 苦痛、苦役、辛苦、そして大きな不安を抱えながら、  
148 被造物は、現世で生きていかなければならない。  
149 被造物は全て罪に囚われており、  
150 そのことで神は憤っていらっしゃるのだ。

XXVI<sup>51)</sup>

- 151 これに対して、もし罪を免れた者がいたならば、  
152 その者の魂には安寧があり、肉体には息災があるだろう。  
153 しかし、何の悪行も為すことなく1日を過ごしたと、  
154 真に言えるのは、一体どんな人だろうか。  
155 しばしば我々の魂と肉体は、  
156 悲しさ、恐ろしさ、惨めさによって悩まされている。

XXVII

- 157 こうした者たちは皆、終末を迎える時点で、  
158 何の善行も為していなければ、悪の道を辿っていった。  
159 ある者は、すぐに過ぎ去ってしまう現世に仕え、  
160 ある者は、悪の果実を結ぶ肉体に仕え、  
161 またある者は、彼らを地獄へと導く敵に仕えた。  
162 もし彼らが善行を為していたならば、これらのことに気づくだろう。

【第2部】(163-337行)

XXVIII

- 163 ああ、なんと多くの悪に満ちた生涯なのだろう。  
164 哀れな罪人は、この世でどれほどのことを為しているのか。  
165 このような人物は、決して生まれてこない方が良かっただろうし、  
166 生後に現世で暮らし、日々死を迎え、  
167 神の戒めに背くくらいであれば、  
168 生まれてすぐに死んだ方が良かっただろう<sup>52)</sup>。

XXIX<sup>53)</sup>

- 169 現世の人間の一生というのは、動物の一生と同じである。  
170 そのことをよく考えるならば、生よりも死の方がましなのである。  
171 ああ、哀れな罪人よ、考えてみるがよい、  
172 汝は臨終の後に死へと至り、  
173 二度と生き返ることはないだろうから、  
174 現世において労苦を得ることはなくなるのだ。

XXX

- 175 多くの労苦を為した後、今、死が訪れる、  
176 侯爵も、皇帝も、逃れることのできない死が。  
177 貧者も、富者も、抗うことはできず、  
178 死を自身の思い通りにはできない。  
179 死が訪れるのは非常に早く、突然やってくるので、  
180 老いも、若きも、自身を守ることはできないのだ。

XXXI

- 181 遅かれ早かれ、死が定められない者は、  
182 誰も現世に生を受けることができない。  
183 死の前では、法も、教皇教令も、無価値である、  
184 なぜなら、死は万人に対して共通の裁きを下すからだ。  
185 一方、法が万人に対して普遍的な判決を下すことはなく、  
186 法の前では、感性も、知恵も、何ら役に立たない。

XXXII

- 187 大いなる危機の中で生きている我々はみな、  
188 自身が知っているよりもなお大きな危機の中で生きている。  
189 なぜなら、いつ我々の元に死が訪れるのかを、  
190 誰一人として知る由もないからである。  
191 死にはそのようなきらいがあるため、  
192 油断すると我々を連れ去ってしまうのである。

XXXIII

- 193 この世に生を受けた者の中には、自身の生涯について  
194 不幸だと少しも思わない者は、誰一人含まれていない。  
195 そして、ある者が長生きするつもりでいると、  
196 残酷な死が、突如として命を奪いにやってくる。  
197 そして、その者が自分は大丈夫だと強く信じている時にこそ、  
198 罪人の命を奪う死がやってくるのである。

XXXIV

- 199 ああ、哀れで、邪悪で、不幸な運命の者よ。  
200 なぜ汝は、汝を創造された主である神によって  
201 自身に命じられたことを為そうとしないのか。  
202 泥棒が自分の家を荒らしに来ると思って  
203 予めそれに備えている人のように<sup>54)</sup>、  
204 夜を徹して常に準備を怠らないことだ。

XXXV

- 205 もし準備を怠っている汝の姿が死の目に留まろうものなら、  
206 死は、ある牢獄に汝を入れようとして、  
207 恐ろしい裁判官の前に連れていくであろう、  
208 すると汝は、喜びも、慰めも、得ることがなくなるのだ。  
209 一方で、生前に汝が日々死の訪れを求めていたとしても、  
210 死の方から汝を求めて来ることは、決してないのである。

XXXVI

- 211 ああ、哀れな罪人よ、注意するがよい、  
212 汝の舟にどのような積み荷を載せるのか<sup>55)</sup>。  
213 現世の海を渡るには多くの危険が伴うため、



214 そこで迷わない旅人は、ほとんどいないのである。

215 そして、自分たちが利を得るための積み荷を

216 舟に載せることができる者はごく稀なのだ。

XXXVII

217 残酷な死が支配している

218 危険な港へと到着するとき、

219 汝は自身の積み荷を変更することはできず、

220 それに応じた対価を受け取らなければならない。

221 港には偉大なる主の会計官がいて、

222 各々の労苦に応じて対価を渡すであろう。

XXXVIII

223 賢明な商人が港へと到着するとき、

224 彼は大きな恐怖を抱いているが、大いなる救慰を得るであろう。

225 なぜなら、金や、銀や、宝石などの

226 良き品々が彼を助けてくれるからである。

227 その商人は船倉を作って、善なる品を積み込んでおり、

228 その数は重しとなる底荷を舟に入れなかったほどである。

XXXIX

229 賢明な商人が港の中へと入っていくとき、

230 彼は会計官から大いなる救慰を受け取るであろう、

231 会計官は、彼に言う。「ああ、善良で忠実なるしもべよ、

232 喜ぶがよい、汝には良き報いがあるだろう。

233 主のしもべたちと共に悠久の安息を得るために

234 我は汝を天の御国へと入らせよう」。

XL

235 残念なことに、その港の入口には、

236 自身の舟に、薪や、干し草や、藁を満載した

237 哀れな罪人がたどり着いていることだろう。

238 舟の舵を取る哀れな船乗りは、

239 自身が抱く大きな恐怖ゆえに、その港の入口で

240 「ああ、ああ、ああ」と、大きな叫び声を3度あげるだろう。

XLI

241 最初は、現世に生を受けた理由について「ああ」と叫ぶ、

242 なぜなら、港に入る準備がまだ十分にできていないからである。

243 次は、現世で暮らした理由について「ああ」と叫ぶ、

244 なぜなら、自身に命じられた善を行わなかったからである。

245 さらに、3度目に「ああ」と叫ぶのは、

246 自身の舟に、多くの罪を載せてしまったからである。

XLII

- 247 舟が港の中へと入っていくとき、  
248 罪人は大きな不安に駆られることだろう、  
249 なぜなら、自身の積み荷が価値あるものとは見做されずに、  
250 キリストの左手側に置かれてしまうからである。  
251 ゆえに、哀れな罪人は嘆息をつき、  
252 「私は不幸だ」と、声に出して3度も言うだろう。

XLIII

- 253 最初は、不幸が訪れることについて「私は不幸だ」と言う、  
254 なぜなら、自分の罪の数々が全て明らかになるからである。  
255 さらに、彼は「私は不幸だ」と泣き叫ぶだろう、  
256 なぜなら、神が彼に残酷な裁きを下すからである。  
257 3度目に「私は不幸だ」と言うのは、  
258 これから先、彼は義の者たちから離れてしまうからである。

XLIV

- 259 その後、罪人に心休まる時はなくなるだろう。  
260 彼は自身の積み荷の対価を受け取るために、  
261 地獄の門をくぐらなければならない、  
262 それが彼の罪と悪行の対価なのだから。  
263 ゆえに、彼は恐怖と大きな不安に満ちていき、  
264 「ああ、ああ、ああ」と、震えながら泣き叫ぶのだ。

XLV

- 265 最初に、罪人が「ああ」と叫ぶのは、  
266 これから先、悪魔たちを主とするからである。  
267 次に、大きな嘆息と共に「ああ」と叫ぶのは、  
268 地獄の懲罰が彼を苦しめるからである。  
269 その後、慟哭と共に「ああ」と泣き叫ぶのは、  
270 これから先、地獄にいる彼には救いがないからである。

XLVI

- 271 哀れな魂が、地獄と呼ばれるその不憫な場所の  
272 牢獄へと落ちてしまったとき、  
273 そこで目視できるものは何もなく、  
274 心にも信じられず、口にも出せない  
275 悲痛な痛みと苦しい嘆息は、  
276 彼が永遠に耐え偲ばなければならないものである。

XLVII

- 277 哀れな罪人の、哀れな魂よ、  
278 汝がそのような苦痛にさらされているときに、

- 279 宝物の数々は、一体どんな利を汝にもたらすだろうか。  
280 汝が自身に与えたあらゆる快樂や、  
281 肉体が受け取ったあらゆる歡喜は、  
282 全て痛みや悲しみへと変わることだろう。

XLVIII

- 283 汝が埋没した自身の罪の渦中において、  
284 長きに渡り眠っていた痛ましい罪人よ、  
285 今こそ目を覚まし、もうここには滞在しないように。  
286 そして、心の目ではっきりと見据え、  
287 悪徳や罪惡、他の欠陥によって<sup>56)</sup>  
288 取り囲まれてしまっている自身に気づくことだ、  
289 さもなくば、歌ったり笑ったりすることへの欲求が汝から逃げていくだろう。

XLIX

- 290 このかくも大きな恐怖から逃れるために、  
291 自身の膝をつき、心を高揚させよ、  
292 そして、真の救世主に向けて、両の手を合わせるのだ。  
293 落涙と、悔悟と、悲嘆と、  
294 憂鬱と、慟哭と、苦痛をもって、  
295 我々の主である神に慈悲を求めるがよい。

L

- 296 そして、次のように述べよ。「ああ、善良なるイエスよ、  
297 神に背いた罪人である私に、どうか憐れみを。  
298 あなたに対して、私は多くの悪事を犯しました。  
299 もし救いがなければ、悪しき港にたどり着いてしまいます。  
300 なぜなら私は、自身の過ちや大いなる不義により、  
301 あなたに対して過度の悪事を犯しているからです」と。

LI

- 302 そして、すぐさま口を開き、  
303 自らが犯した背任、罪惡、悪行について、  
304 悲歎や悔悟の念と共に、ただちに告白することだ。  
305 恥じることなく、他のいかなる理由によっても、  
306 自身の心の内を全て晒して告白するのを怠らないように。  
307 さすれば、汝は神から真の赦しを受けられよう。

LII

- 308 汝が聴罪司祭の前に座す時、次のように述べよ。  
309 「罪人である私は、神とあなたの前にやってきました  
310 私が自身の罪を、正しく、真に贖えるよう、  
311 善良な助言と真の悔悛を私にお与え下さいますように」と。

312 それから、口を開き、自身のあらゆる罪と欠落を、  
313 はっきりと告白することだ。

LIII

314 そして、自身が尋ねられるまで待つことなく  
315 すぐに聞いてもらえるよう、自ら話し始めよ。  
316 まずは、七つの罪源について話し<sup>57)</sup>、  
317 汝がどのような罪を犯したかを1つずつ語るのだ。  
318 さらに、五感の罪と  
319 十戒の違反についても話すように。

LIV

320 加えて、汝の悪しき発言の数々についても述べよ。  
321 汝がどのように嘘をつき、誓い、悪意を持って非難し、  
322 呪い、冒涇したのか……このように嘆かわしく、  
323 長々と語られる他の虚しき発言について述べるのだ。  
324 そして、汝が涙を流して悔い改め、  
325 あらゆる罪を完全に告白し終えた暁には、

LV

326 安寧のために、自身の中に善良な心をしっかりと留め置き、  
327 これまでの失敗に立ち戻ることのないようにせよ。  
328 そして、汝に与えられる善良な助言を、  
329 心の中でしっかりと保持し、根付かせておくことだ。  
330 さすれば汝にとって、死の宣告を受ける前に  
331 多少の懺悔をすることは、さほど難しくないだろう。

LVI

332 もしキリストが嘘をついていなければ、これをしない者は  
333 永遠の苦悩の中で、延々と罰せられるだろう。  
334 なぜなら、地獄では贖いができず、  
335 有益かつ善良な告白も一切できないからである。  
336 神は、その情熱によって、我々を地獄から救い出し、  
337 皆々を聖なる館へと迎え入れて下さるのである<sup>58)</sup>。

アーメン

注

- 1) 以下、中世ヴァルド派の組織構築の変遷に関しては、Audisio, G. (2001). *L'organisation de la clandestinité vaudoise. Religion et exclusion, XIIe-XVIIIe siècle*, 61-70. を参照。
- 2) バルバ Barba とは、ピエモンテ方言で「小父」（もしくは「年長者」）を意味する語である。「小父」という呼称を用いた理由は、彼らにとって「父」と呼ぶべき存在は神のみであり、カトリック教会の教皇 Papa のように、人間に「父」という呼称を用いることを避けたかったという意図が含まれる。
- 3) 中世ヴァルド派文書は 180 本以上現存しており、その大部分が 15 世紀から 16 世紀にかけて作成され

- たとされる。同文書に含まれる諸作品の概要については, Gonnet, G., & Molnár, A. (1974). *Les vaudois au moyen âge*. Claudiana, 319-370. « La littérature vaudoise » の項が詳しい。
- 4) Gonnet., & Molnár. *op.cit.* 328.
  - 5) Comba, E. (1887). *Histoire des Vaudois d'Italie depuis leurs origines jusqu'à nos jours*. Librairie Lœscher, 269-271. Comba は, 中世ヴァルド派が拠点としていたピエモンテの谷で本作品が制作されたことについて, 疑義を呈している。
  - 6) 拙訳 (2019). 「中世ヴァルド派詩編『崇高なる読誦』」, 『立命館言語文化研究』, 31 (1), 251-270.
  - 7) Gonnet., & Molnár. *op.cit.* 328.
  - 8) Gonnet, G. (1998). *Enchiridion Fontium Valdensium II (Recueil critique des sources concernant les Vaudois au moyen âge)*. Claudiana, 114. « Vidi et audiui rusticum ydiotam, qui Iob recitavit de verbo ad verbum, et plures alios, qui totum novum testamentum sciverunt perfecte. »
  - 9) *Ibid.* 118. « Item rarus est doctor inter eos, qui tria capitula continua novi testamenti litteraliter sciat corde. Apud nos vero rarus est vir vel femina, qui textum eundem non sciat vulgariter recitare. »
  - 10) Montet, É. L. (1885). *Histoire littéraire des Vaudois du Piémont d'après les manuscrits originaux conservés à Cambridge, Dublin, Genève, Grenoble, Munich, Paris, Strasbourg et Zurich*. Librairie Fischbacher, 127-128.
  - 11) Cf. Vogel, L. (2018). A Noble Lesson: the Poems of the Early 16th Century Waldensian Manuscripts. *Poetry and theology*, 129-130. を参考に, 訳者作成。「行数」の項目において, (C) は Cambridge 写本, (G) は Genève 写本, (D) は Dublin 写本を, それぞれ示している。
  - 12) *Mss.Dd.XV.30*. Cambridge University Library.
  - 13) Cf. Todd, J. H. (1865). *The Books of the Vaudois: The Waldensian Manuscripts Preserved in the Library of Trinity College, Dublin*. Macmillan and Co, 43-46.
  - 14) *Mss.Ge.207*. Bibliothèque Publique et Universitaire de Genève.
  - 15) *Mss.C.5.21. (261)*. Trinity College Library of Dublin.
  - 16) Apfelstedt, F. (1880). Religiöse Dichtungen der Waldenser, Genauer Abdruck der Genfer Hs. 207. 2. La Barca. *Zeitschrift für romanische Philologie*, 4, 330-346.
  - 17) Balma, G. (1904). I poemi valdesi. Lo Novel Sermon. La Barca. *Bulletin de la Société d'Histoire Vaudoise*, 21, 53-56.; Balma, G. (1906). *La Barca, antico poema valdese*. Claudiana.; Balma, G. (1906). Les poèmes vaudois d'après le manuscrit inédit de Dublin. *Bulletin de la Société d'Histoire Vaudoise*, 23, 3-55.
  - 18) その他, 『舟』に関する先行研究は Armand Hugon, A., & Gonnet, G. (1953). *Bibliografia valdese*. Tipografia Subalpina, 105. を参照。
  - 19) Gonnet., & Molnár. *op.cit.* 328.
  - 20) 『舟』は 6 行で 1 連を構成する詩であり, 各行の脚韻には a a b b c c, a a a b b b, a a a a b b, a a b b b b, a a a b b b などの組み合わせが確認できる (たとえば, a a b b c c の脚韻だと, 行の最後に配置される語が *O vita plena de tant caitio lavor* ! / *Cant fai en aquest mont lo miser peccador* ! / *Melh fora a luy qu'el unca non fossa na* / *O na subitament fos agu so terra*, / *Que enaisi viore e chascun iorn morir*, / *E a li comandement de Dio desubedir*. となり, 2 行ごとに末尾の音の種類が揃えられている)。各行は, 1 行が 12 音節で構成される「アレクサンドラン」(仏: alexandrin) が基本形式と考えられるが, 行によって音節数に多少の加減があり, 作品全体を通して 12 音節による構成が忠実に守られているわけではない。
  - 21) Chaytor, H. J. (1930). *Six Vaudois poems from the Waldensian Mss in the University libraries of Cambridge, Dublin and Geneva*. Cambridge University Press.
  - 22) 松田隆美 (2017). 『煉獄と地獄——ヨーロッパ中世文学と一般信徒の死生観』おねうま舎, 117-119.
  - 23) 中世において, 現世から彼岸へと旅をする際, 死後の命運の分かれ道として登場するモチーフは「橋」である。ただ, 「橋」ほど頻繁ではないが, 「梯子」や「二輪の荷馬車」, 本作品に登場する「小舟」な



- ども彼岸への旅の手段となったようである。Cf. 池上俊一（2012）.『中世幻想世界への招待』河出書房新社, 330-341.
- 24) Chaytor. *op.cit.* xiv & 76-80.
- 25) Dal Corso, M. (1979). Su una fonte latina del poemetto "La Barca". *Bollettino della Società di Studi Valdesi*, 145, 22.
- 26) Chaytor (1930), Dal Corso (1979), 瀬谷 (1999) を参考に, 訳者作成。
- 27) Dal Corso. *op.cit.* 33.
- 28) 松田. 前掲書. 39.
- 29) *La Barca*, II. / *De Contemptu mundi*, Incipit prologus.
- 30) ヨハネ黙示録・第12章7-8節。「第1の天使」とは, 大天使ミカエルのことを指す。ミカエルは, 天国か地獄かという来世の行先を決めるために, 善行の多さと悪行の多さとを天秤にかけて測る存在とされていた。Cf. 石坂尚武 (2016).『地獄と煉獄のはざままで——中世イタリアの例話から心性を読む』知泉書館, 61-62.
- 31) Dal Corso. *op.cit.* 22.『舟』における10-12行(vv.10-12.)の記述は『現世の蔑視』に対応する箇所がなく, 『舟』の作者が加筆した可能性がある。
- 32) *La Barca*, III. / *De Contemptu mundi*, I. De miserabili humanae conditionis ingressu.
- 33) *La Barca*, IV-V. / *De Contemptu mundi*, II. De vilitate materiae ipsius hominis.
- 34) *La Barca*, VI-VII. / *De Contemptu mundi*, III. De vicio conceptionis.
- 35) *La Barca*, VIII-IX. / *De Contemptu mundi*, IV. De conceptione infantis.
- 36) Cf. Innocentii III, (ed.) Achterfeldt, J. H. (1855). *De Contemptu mundi, sive de miseria humanae conditionis*. Apud Eduardum Weber, 18.『舟』には具体的に記されていないが, この3つの自然的徳 (tres naturales vires) とは「善悪を区別するための理性」rationalem, ut discernat inter bonum et malum, 「悪を追い払うための攻撃性」irascibilem, ut respuat malum, 「善を求める渴望性」concupiscibilem, ut appetat bonum を指すと考えられる。
- 37) *La Barca*, X. / *De Contemptu mundi*, V. Quali cibo conceptus nutriatur in utero.
- 38) *La Barca*, XI. / *De Contemptu mundi*, VIII. De nuditate hominis.
- 39) ヨブ記・第1章21節。
- 40) *La Barca*, XII. / *De Contemptu mundi*, VI. De inbecillitate infantis.
- 41) *La Barca*, XIV. / *De Contemptu mundi*, VII. De dolore partus et eiulatu infantis.
- 42) *La Barca*, XVII. / *De Contemptu mundi*, IX. Quem fructum homo producit.
- 43) *La Barca*, XVIII. / *De Contemptu mundi*, X. De incommodis senectutis et brevitate vitae hominis.
- 44) 創世期・第5章5-14節。
- 45) 詩篇・第90章10節。『舟』では「100年」という数字になっているが, 『現世の蔑視』では詩篇の句を借りて「人生の年月そのものは70年で, 健康ならば80年である」Dies annorum nostrorum in ipsis septuaginta annis – si, autem, in potentatibus, octoginta anni と記されている。Cf. Innocentii III, & Achterfeldt. *op.cit.* 25.
- 46) *La Barca*, XIX. / *De Contemptu mundi*, XI. De incommodis senectutis.
- 47) Cambridge 写本と Dublin 写本では, 111 行目 (v.111.) « La li manca lo sen e son entendament » が欠落している。
- 48) *La Barca*, XXI. / *De Contemptu mundi*, XIII. De studio sapientum.
- 49) *La Barca*, XXIV. / *De Contemptu mundi*, XIV. De variis studiis hominum.
- 50) *La Barca*, XXV. / *De Contemptu mundi*, XV. De diversis anxietatibus, XVI. De miseria divitis et pauperis.
- 51) *La Barca*, XXVI. / *De Contemptu mundi*, XXII. De brevi laetitia hominis. Dal Corso (1979) によれば, 「155-160 行目」(本翻訳では153-156行目が該当) が, *La Barca* / *De Contemptu mundi* の対応関係が確

- 認できる最後の部分であるという。Cf. Dal Corso. *op.cit.* 32.
- 52) ヨブ記・第 3 章 11 節。
- 53) *La Barca*, XXIX. / *De Contemptu mundi*, XXIV. De vicinitate mortis. Chaytor (1930) によれば, XXX. より先の部分は *De Contemptu mundi* の内容に対応するものではなく、『舟』の作者による一般的な「死」というものについての分析と説明がなされているという。Cf. Chaytor. *op.cit.* 79.
- 54) マタイによる福音書・第 24 章 43 節, ルカによる福音書・第 12 章 39 節。
- 55) 本作品のタイトルにもなっている「舟」barca は, 212 行目 (v.212) にて初めて登場する。« De queina marcandia tu cariares ta barca » (下線は訳者による付記)
- 56) 『舟』は 6 行で 1 節を構成している作品だが, XLVIII. に関してのみ, 例外的に 7 行で 1 節を構成している。ただし, 現存する写本の中で最も古い Cambridge 写本では 287 行目 (*La Barca*, v.288.) « De vicis e de pecca e d'autre mancamment » が記されていないため, 当該行は Cambridge 写本作成時に欠落したか, 後世に加筆された可能性がある。
- 57) 7つの罪源は「傲慢 superbia, 強欲 avaritia, 嫉妬 invidia, 憤怒 ira, 色欲 luxuria, 暴食 gula, 怠惰 pigritia」のことを指す。
- 58) Gonnet., & Molnár. *op.cit.* 331. この結論にあたる部分は、『崇高なる読誦』で記されている内容と同じものと理解できる。Cf. 拙訳・前掲書・266. 「世界を作られた, あの主の御心のままに, どうか私たちが彼の王宮に留まれる選民でいられますように」(『崇高なる読誦』480-481 行)。悪人であっても真の懺悔を行うことで, 神が地獄から救いだし, 天国(『舟』では「聖なる館」, 『崇高なる読誦』では「王宮」と表現されている)に迎え入れて下さる, という結びになっている。

## 参考文献

- Apfelstedt, F. (1880). Religiöse Dichtungen der Waldenser, Genauer Abdruck der Genfer Hs. 207. 2. *La Barca. Zeitschrift für romanische Philologie*, 4, 330-337.
- Armand Hugon, A., & Gonnet, G. (1953). *Bibliografia valdese*. Tipografia Subalpina.
- Audisio, G. (2001). L'organisation de la clandestinité vaudoise. *Religion et exclusion, XIIe-XVIIIe siècle*, 61-70.
- Balma, G. (1904). I poemi valdesi. Lo Novel Sermon. *La Barca. Bulletin de la Société d'Histoire Vaudoise*, 21, 39-61.
- Balma, G. (1906). *La Barca, antico poema valdese*. Claudiana.
- Balma, G. (1906). Les poèmes vaudois d'après le manuscrit inédit de Dublin. *Bulletin de la Société d'Histoire Vaudoise*, 23, 3-55.
- Chaytor, H. J. (1930). *Six Vaudois poems from the Waldensian Mss in the University libraries of Cambridge, Dublin and Geneva*. Cambridge University Press.
- Comba, E. (1887). *Histoire des Vaudois d'Italie depuis leurs origines jusqu'à nos jours*. Librairie Loescher.
- Dal Corso, M. (1979). Su una fonte latina del poemetto "La Barca". *Bollettino della Società di Studi Valdesi*, 145, 21-34.
- Gonnet, G., & Molnár, A. (1974). *Les vaudois au moyen âge*. Claudiana.
- Gonnet, G. (1998). *Enchiridion Fontium Valdensium II (Recueil critique des sources concernant les Vaudois au moyen âge)*. Claudiana.
- Innocentii III, (ed.) Achterfeldt, J. H. (1855). *De Contemptu mundi, sive de miseria humanae conditionis*. Apud Eduardum Weber.
- Le Goff, J. (1981). *La naissance du Purgatoire*. Édition Gallimard.
- Montet, É. L. (1885). *Histoire littéraire des Vaudois du Piémont d'après les manuscrits originaux conservés à Cambridge, Dublin, Genève, Grenoble, Munich, Paris, Strasbourg et Zurich*. Librairie Fischbacher.

- Todd, J. H. (1865). *The Books of the Vaudois: The Waldensian Manuscripts Preserved in the Library of Trinity College, Dublin*. Macmillan and Co.
- Vogel, L. (2018). A Noble Lesson: the Poems of the Early 16th Century Waldensian Manuscripts. *Poetry and theology*, 127-145.
- 拙訳 (2019). 「中世ヴァルド派詩編『崇高なる読誦』」, 『立命館言語文化研究』, 31 (1), 251-270.
- 池上俊一 (2012). 『中世幻想世界への招待』 河出書房新社.
- 石坂尚武 (2016). 『地獄と煉獄のはざまで——中世イタリアの例話から心性を読む』 知泉書館.
- 松田隆美 (2017). 『煉獄と地獄——ヨーロッパ中世文学と一般信徒の死生観』 ぶねうま舎.
- (著) デイ・セニ, ロタリオ, (訳) 瀬谷幸男 (1999). 『人間の悲惨な境遇について』 南雲堂フェニックス.

